

I 研究の概要

1 学校の特色や学校をとりまく地域の教育的環境

本校は徳島県南部の美波町にあり、自然豊かな環境にある全校生徒76名の小規模校である。

長年「今日も来てよかった日和佐中学校」という生活目標を掲げ、生徒を主体とした校則の見直しなど学校生活の点検を行ってきた。この生活目標を学校目標に掲げ、生徒の主体的な活動や他者との積極的なコミュニケーションを促し、互いを大切に思い認め合うことになげようと、具体的な指導の改善・工夫に取り組み、人権意識の醸成をめざしてきた。

2 研究主題

＜文部科学省指定研究＞

「自他の人権を尊重し、共生できる生徒の育成」

＜徳島県中学校人権教育研究会＞

「人権尊重社会の実現を図るために、差別の現実から深く学び、

すべての子どもの自己実現と共生・共存をめざす教育を確立しよう」

～人権意識の高揚を図り、同和問題をはじめ様々な人権問題解決への

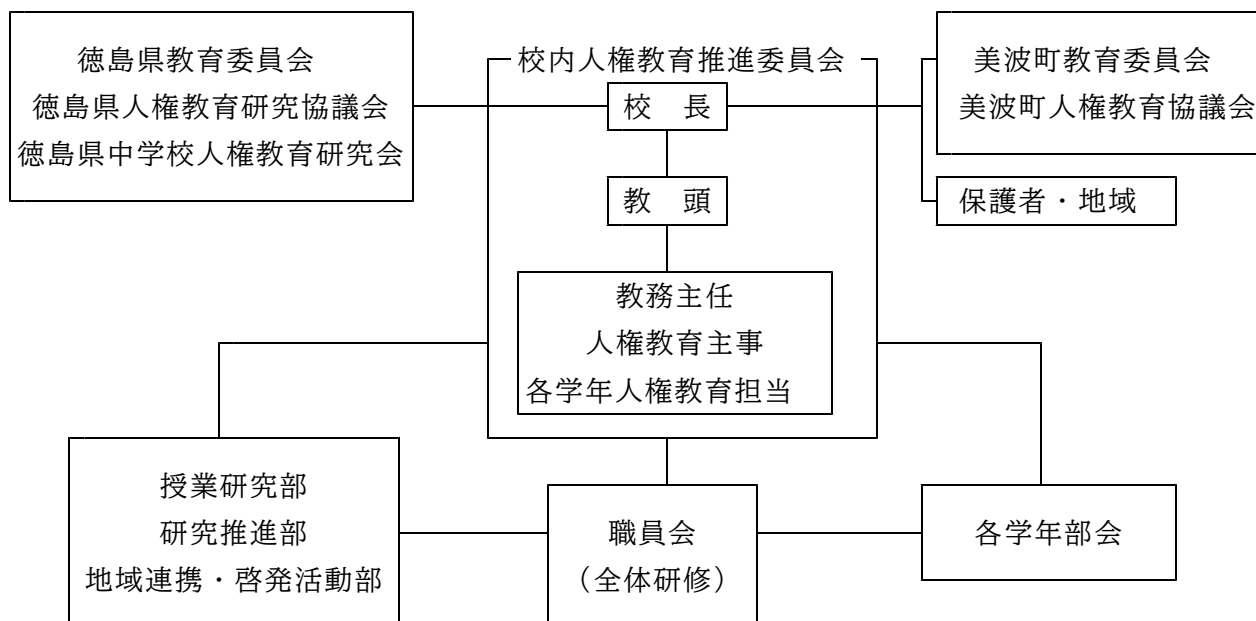
意欲と実践力をもった生徒を育てるための教育を実践しよう～

3 研究主題を設定した理由

本校の生徒は明るく純朴で、頼まれたことには自分なりに精一杯取り組み、落ち着いた生活態度で学校生活を送ることができている。しかし、全体的に受け身がちで、自主性には課題が見られる。本校区の小学校は1校でクラス替えもなく、ほとんどの生徒は同じ顔ぶれで長年過ごしてきたため、人間関係が固定化しつつある。その中で対立やトラブルを避けるために、互いの様子をうかがい意見を言えない事が多い。逆に周囲への配慮に欠ける言い方になる生徒もいるなど、自分の思いを伝えることに課題がある。その結果、人間関係の希薄さや主張する生徒の意見ばかりが通ってしまうという現状があった。人権学習においても、課題に真剣に向き合うものの、自ら発表する生徒は同じメンバーで、当たり障りのない形式的な発言に留まりがちであった。人権学習での学びが生徒自身の生活に反映され、日常化していないために、周囲との人間関係の改善につながっていないのではないかと考える。自分の思いを伝えず、不満を抱え続ける状況は、自分の人権も相手の人権も尊重しているとはいえないだろう。

そこで、差別の実態から深く学ぶための体験的な学習を重視し、その学びを深め、より生徒自身の生活に反映させるための話し合い活動を教育活動全体で取り入れることにした。話し合い活動を継続することで、生徒の人権意識を高め、活動から学び、他者を承認できる学級・学校をつくりあげることがめざす。この話し合いの中で互いに承認する経験が、自他の人権を尊重し、共生していく生徒の育成につながるのではないかと考える。生徒一人一人が互いの人権を認め、共生できる学校をつくりあげるため、本研究主題を設定した。

4 調査研究の組織



5 調査研究の内容

令和5年度は、県の「多様性を認め合う人権教育推進協力校事業」の指定を受け、話し合い活動を生徒が主体的に取り組むことをめざして、「日中トーク」と名付けた活動に取り組んだ。

「日中トーク」は、生徒が人権についての学習を振り返って題材を探し、よりわかりやすく楽しい表現になるよう話し合う活動である。参観日に各学級で「日中トーク」を披露したが、保護者にも好評だった。その後の生徒アンケートでは、「楽しかった」「まあまあ楽しかった」という回答が91%を占めた。教職員も初めての試みで心配したが、生徒の底力を見た思いだった。生徒が発表に向けて集中し、取り組む様子から成長を感じることができた。

しかし、「日中トーク」の効果を教職員それぞれが感じつつも、「日中トーク」を行事の中で行うだけで、ねらいは達成できるのかという意見があった。そこで、令和6年度の教職員で、「日中トーク」のねらいを今一度見直すことにした。「日中トーク」は、自分の考えを語り、相手の意見を傾聴するやりとりを大切にする。そのやりとりを通じて、人権意識を高め、互いに承認する経験を重ねることで生徒の成長を促すのが「日中トーク」である。それならば、生徒の日常の活動にこそ、「日中トーク」の考えは生かされるべきではないか。その方が生徒の生活に根ざし、学びの日常化につながるのではないかと考えた。

このような考えから、自ら課題を発見し、自分の考えを自分の言葉で表現、他者の意見を傾聴、自分の考えと照らし合わせて承認する、この一連のプロセスを「日中トーク」とし、それを日和佐中学校の取組の柱と位置づけることにした。そして、「日中トーク」ができるためには、教室に「安心感」があることが重要である。そんな教室づくり・学校づくりに、教職員全員が人権教育への思いを再確認して、チームとして取り組むことにした。

以上のことから、次のことを令和6年度の調査研究の内容とした。

- ① 体験的な学びを重視した人権教育の推進と、人権尊重の視点に立った学校環境づくり
- ② コミュニケーション能力の育成とそれを支える集団の雰囲気づくり
- ③ 学びの日常化につながる話し合い活動の工夫
- ④ 生徒の変容の検証・評価

6 調査研究の実施方法と検証・評価・普及

(1) 実施方法

- ① 体験的な学びを重視した人権教育の推進と、人権尊重の視点に立った学校環境づくり
 - ・体験的な学びを取り入れる授業の工夫
 - ・個別人権課題についての教育の推進
 - ・講師を招いての講演や体験活動の計画
 - ・地域の特別支援学校との行事交流や地域行事への参加の促進
 - ・生徒会活動の充実
 - ・人権尊重の視点に立った掲示物作成の工夫
 - ・異学年活動の充実による人間関係の醸成
 - ② コミュニケーション能力の育成とそれを支える集団の雰囲気づくり
 - ・ICTを活用し、プレゼンテーション作成やまとめ学習を活動に取り入れる工夫
 - ・様々な組み合わせでのペアワークや班活動の実施
 - ・各教科におけるプレゼンテーションのスキルアップにつながる授業の工夫
 - ・教職員自身の知識やスキルを更新する研修の充実
 - ③ 学びの日常化につながる話し合い活動の工夫
 - ・話し合い活動を取り入れる授業の工夫
 - ・生徒の生活へつなげるための発問の工夫
 - ・話し合い活動のルールの徹底
 - ④ 生徒の変容の検証・評価
 - ・単元前後にアンケートを実施、生徒の変容を検証する。
 - ・生徒の人権意識についてのアンケート調査を行い、評価・検証する。
 - ・hyper-QUテスト、学校評価アンケートなど、前年度と比較する。
 - ・生活記録、授業のワークシート、講演会の感想、日常生活の会話などから生徒の意識の変容等を検証する。
- ### (2) 改善・普及
- ・生徒の変容の検証・評価により、課題把握に努め、教育活動や学校環境の改善を行う。
 - ・学年通信や学校だより、ホームページ等を活用し、地域や保護者に周知する。
 - ・他教科や他学年の授業参観と教職員間の授業評価を積極的に行う。また、研究授業後の授業研究会を充実させ、授業改善につなげる。

7 令和6年度の研究過程

時 期	内 容	備 考
4月4日	校内研修（調査研究・大会運営・研究体制について共通理解）	全教職員
4月11日	校内人権教育推進委員会①（研究内容確認・研修等年間計画）	教職員6名
4月15日	校内研修（取組の柱・目標、役割分担の確認）	全教職員
4月18日	学年部会（生徒の実態・課題・指導の手立て・研修計画）	全教職員
5月2日	校内研修（一学期人権教育研修・講演会等の計画）	全教職員
5月7日	分団（異学年班）結団式	全生徒・全教職員
5月9日	校内研修（学年研修計画について）	全教職員
5月17日	新入生歓迎球技大会	全生徒
5月24日	美波町人権教育協議会総会・研修（講師：県人権教育研究協議会 安原剛さん）	教職員2名
5月29日	人権講演会「こころの授業」（講師：臨床心理士 大西尚子さん）	全生徒
5月30日	校内研修（「学校における人権教育について」講師：長町真一郎班長）	全教職員
6月6日	校内人権教育推進委員会②（アンケート・研究紀要について）	教職員6名
6月10日	人権に関するアンケート・hyper-QUテストの実施	全生徒
6月21日	人権講演会「日本人の忘れ物」（講師：県人権教育指導員 太田光俊さん）	1, 2学年生徒
6月24日	人権講演会「歌や人から学ぶ人権」（講師：県人権教育指導員 西本篤人さん）	3学年生徒
7月1日	校内研修（「ポジティブな行動支援①」オンライン「学びの広場」）	全教職員
7月4日	研究授業（1年A組別宮有希教諭）「共に生きる」 授業研究会（指導助言：野上昌志指導主事）	全教職員
7月5日	研究授業（2年A組橋本隼教諭）「共に生きる」 授業研究会（指導助言：長町真一郎班長）	全教職員
7月11日	研究授業（3年A組東甫英佑教諭）「誇りうる生き方を求めて」 授業研究会（指導助言：県人権教育指導員 牧逸馬さん）	全教職員
7月12日	校内意見作文発表会・人権集会	全生徒・全教職員
7月19日	校内研修（研究紀要・指導案・日程について）	全教職員
8月5日	校内指導案検討会	全教職員
8月22日	阿南支援学校ひわさ分校特別支援講演会「不登校の児童生徒に 対する『積極的登校支援』について」（講師：白桃智子指導主事）	教職員5名
8月22日	海部郡教育文化講演会	教職員5名
8月23日	第1回徳島県人権教育研究推進授業連絡協議会（オンライン）	教職員2名
8月26日	中人研大会指導案検討会	全教職員
9月6日	校内人権教育推進委員会③（研究紀要について）	教職員6名
9月18日	高齢者疑似体験・車いす体験（県介護実習・普及センター）	1, 2学年生徒
9月25日	人権に関するアンケートの実施	全生徒
9月26日	研究授業（2年A組橋本隼教諭）「共に生きる」 授業研究会（指導助言：長町真一郎班長）	全教職員

10月3日	研究授業（1年A組別宮有希教諭）「共に生きる」 授業研究会（指導助言：野上昌志指導主事）	全教職員
10月11日	防災学習（講師：南部県民局地域創生防災部津波減災危機管理担当）	2 学年生徒
10月16日	人権講演会「性の多様性」（講師：県人権教育指導員 徳山富子さん）	1 学年生徒
10月17日	研究授業（3年A組東甫英佑教諭）「誇りうる生き方を求めて」 授業研究会（指導助言：県人権教育指導員 牧逸馬さん）	全教職員
10月23日	校内研修（「ポジティブな行動支援②」オンライン「学びの広場」）	全教職員
11月5日	人権コンサート	全生徒・教職員
11月8日	文部科学省指定人権教育研究発表会（日和佐中学校）	全生徒・教職員 県内中学校等 参加者約200名
12月	校内人権教育推進委員会④（研究成果と課題の分析）	教職員 6 名
令和 7 年 1 月	校内人権教育推進委員会⑤（研究報告書の作成） 学校評価アンケート	教職員 9 名 全生徒・教職員
2～3月	人権に関するアンケート実施 第2回徳島県人権教育研究推進授業連絡協議会（オンライン） 校内人権教育推進委員会⑥（年間指導計画の見直し・作成） 学校評価アンケートの考察と公表 校内研修（取組の振り返りと次年度の計画）	全生徒 教職員 2 名 教職員 6 名 教職員 6 名 全教職員

Ⅱ 具体的な取組

1 学校全体の取組

(1) 講演会・学校行事

① 人権教育講演会「心のバリアフリー」

令和5年6月に、あいぽーと徳島人権啓発推進員 久保修さんを招き、校内人権教育講演会を行った。「心のバリアフリー」と題した講演会では、脳性小児マヒによる重度障がいの久保さんが、子どもの頃の体験やご家族の話、マヒのためにできないこと、克服したことなどを話してくださった。久保さんの真摯な話に、生徒は真剣に聞き入っていた。

<生徒の感想>

- ・体を動かすのも大変そうで、少し心配でした。でも皆の前では笑顔でいて、すてきだと思いました。
- ・障がいのある人を見たら「かわいそう」と思っていたけど、久保さんの話を聞いて、障がいがあるからといって不幸なわけではないとわかりました。
- ・久保さんの話を聞いて、障がいのある人へ偏見をもっていたことに気がきました。

② こころの健康づくり講演会

令和5年11月に、助産師 山本文子さんを招き、「いのちの記念日～生まれてきてくれてありがとう～」と題した講演会を行った。助産師としての経験から、性と命の大切さを語ってくださった山本さんの、年齢を感じさせないパワフルさと性についての率直な話に、生徒は驚き、家族のことや命について改めて考えることができた。

<生徒の感想>

- ・私を産んでここまで育てて大事にしてくれた両親や周りの人に感謝し、一つだけの私の命を大切にしようと思います。
- ・もし人生の中で死にたいくらい辛いときがあったら、「助けて」と自分から言うことも大切だということを教えてもらいました。
- ・どうしようかなと迷ったとき、やりたいと思えるから迷っているんだと思って、チャレンジする方向へ向かっていきたいです。

③ 人権講演会「こころの授業」

令和6年5月、臨床心理士 大西尚子さんを招き、「こころの授業」と題した講演会を行った。こころの仕組みやストレスについて教えてくださり、自分の心の状態や自分と人とは同じでなくて当たり前ということを、ワークショップや体験で感じさせてくださった。ストレスの克服の仕方を学び、自分と向き合うことの大切さを考えることができた。思春期の今の生徒の心に寄り添った話だった。



ワークショップ

<生徒の感想>

- ・自分の今の気持ちや、今のストレスの具合、何が原因か、ということ自分を問いかけてみることが大切だと気付きました。「みんな違うことは当たり前」と聞いて、安心しました。
- ・講演を聞いて、自分の心を大切にしようと思いました。ストレスをためすぎてしまうと、人に不快な思いをさせてしまうかもしれないので、ストレス発散をして、気持ちをリラックスさせたいと思いました。
- ・今まで何となくやっていたピアノや手芸などが自分のストレス発散だったんだなと思うことができました。この講演会は今の自分を振り返る時間になりました。
- ・ストレスを発散したり、気分転換したりする方法は、探してみるとたくさんあると思いました。これからは困ったときはあまり無理をせず、周りの人に助けを求めようと思います。

④ 高齢者疑似体験

令和5年5月に、徳島県介護実習・普及センターにお願いし、2,3年生それぞれで高齢者疑似体験を行った。2人1組でゴーグルや装具をつけた高齢者役と介助役になり、洗濯物干しや買い物など、お年寄りが普段の生活の中で行うことを体験した。

令和6年度は9月に、1,2年生が高齢者疑似体験に加えて車いす体験、自助具・福祉用具体験を行った。車いす体験では、車いすに乗って目を閉じ、声かけなしで体育館内のコースを押される体験をし、声かけの大切さを感じることができた。自助具・福祉用具は実際に使ってみて、その便利さや工夫に感心していた。

<生徒感想>

- ・高齢者の人は、こんなにも体が動かしにくいのに、毎日洗濯をしたりご飯を食べたり新聞を見たり買い物をしたりしているんだと思いました。腰のあたりがものすごく痛かったです。腰が痛いのに買い物をするために重いかごを持ち、会計をするためにお金を支払おうと思ってもお金が見つらなくて分からず、やっと見つけて会計を終わらしても、腰が痛くて帰りが大変でした。
- ・周囲が見にくいので、人とぶつかりそうになるのを止めるのが難しかったです。これから地域の高齢者が困っていたら、積極的に助けようと思いました。



白内障ゴーグルをつけて食事



買い物とその介助



洗濯物干し



車いす体験



階段の昇降



自助具体験

⑤ 文化祭の取組

令和5年9月に行った文化祭のステージの部では、各学年で、それまでの人権学習で学んだ内容を取り入れた劇に挑戦した。

1年生はクイズ番組形式で、インターネットのフェイクニュースやジェンダーギャップなどの問題と解説を、楽しくわかりやすく生徒が演じた。回答者・出題者・コメンテーター役をグループで演じることで、人前で思いを伝えることが苦手な生徒も参加しやすくなり、当日は全員が舞台に立つことができた。

2年生は学級委員を中心に、どのようなテーマにするか話し合いを重ね、障がい者の人権問題に決定した。シナリオを4人の生徒が考え、完成させた。将来を期待されていた陸上選手が事故で歩けなくなり、周囲の反応に悩む中、車イスで働く人とそれを応援する人々に出会い、前向きな気持ちになるというストーリーだ。学級全員で取り組み、セリフの練習や準備を重ねた。失敗もあったが、やりきった思いが強かったようだ。

3年生は「性の多様性」をテーマに、誰もが幸せに生きていくためにはどうすればよいか考えた。台本を教職員と生徒が練り上げ、練習を重ねる中で、誰もが幸せに生きていくためには「自分らしく」「認め合う」「助け合う」ことが大切であることに気づき、生徒はそれを他の学年にも伝えたいと本番に臨んだ。



1年劇「It's show time!」



2年劇「人生の楽しさ」



3年劇「幸せのあいことば」

(2) 生徒会活動における取組

① 生徒会本部の取組「さわやか集会」

本部主催の大きな行事に、毎年2月末頃に行っている「さわやか集会」がある。何十年前前に県内の中学校に先駆けて、生徒会の活動により頭髪自由化を成し遂げた。その自由化に際して自分たちで「さわやかでいこう」というルールを決めた集会が始まりである。この集会は、日頃の生活を見直し、学校スローガン「今日も来てよかった日和佐中学校」を達成するために開かれている。本部役員が議題を出し、集会を進行する。全校生徒の前で発言することは勇気のいることだが、自分から進んで発表し、またそれに続く姿を上級生が率先して見せることが

伝統でもある。



さわやか集会



3年生からのメッセージ



先輩へのメッセージ

② 人権ボランティア委員会の取組

本校は全校生徒が生徒会専門委員会のいずれかに所属する。人権ボランティア委員が全校生徒への人権啓発活動を行う中で、委員を中心に徐々に人権を尊重していこうとする意識の高まりがみられるようになってきた。

・あいさつ運動

人権ボランティア委員会では3班に分かれて、毎週月・水・金に、午前7時45分からの10分間、生徒昇降口であいさつ運動を行っている。まずは人権ボランティア委員が大きな声で挨拶できるよう取り組んでおり、教職員も共に活動している。委員の挨拶に、それぞれ挨拶を返してくれるため、気持ちのよいさわやかな雰囲気、1日が始まっている。

・校内意見作文発表会・人権集会

7月には校内意見作文発表会ならびに人権集会を、人権ボランティア委員の進行により実施している。各学年代表3人、計9人の作文を発表し、その後、全校での人権集会を行う。令和5年度の人権集会は、意見作文を聞いての感想や心に残ったことを発表した。令和6年度の人権集会は、人権ボランティア委員で話し合い、意見作文の感想に加えて、「言われて嬉しかったこと」をテーマにした。全校生徒の集まる中で発言することは難しかったが、何人かの生徒が進んで発表したことをきっかけに、発表する生徒が続いた。昨年度は発表できなかった2、3年生が発表する場面もあり、成長を感じた。



人権集会での発表

・掲示物作成

生徒昇降口の掲示板に、ポスターやお知らせのほか、人権に関する新聞記事の切り抜き、メッセージなどを作成し、掲示している。「ふわふわ言葉がいっぱい」などは、人権ボランティア委員会で記入できるカードを用意して、他の生徒にも自由に書いてもらえるようにしたところ、何人かがカードを書き、ふわふわ言葉のハートがぎっしりになった。



人権に関する記事の切り抜き



「キラリ輝く行動・一言」



「ふわふわ言葉いっぱい」

・人権コーナーの整備

令和5年度末、校舎2階に人権コーナーを設けた。ソファとテーブルを設置し、人権に関する本を置き、自由に読めるようにした。コーナーの一角に、「がんばる力をくれる名言紹介カード」を作成・掲示した。



人権コーナー

(3) 保護者・地域との連携

① 「みなみ・にこにこ人権フェスティバル」への参加

毎年11月23日に美波町では「みなみ・にこにこ人権フェスティバル」が開催されている。毎年、人権ボランティア委員会を中心に希望者がスタッフとして参加するほか、多くの生徒が観客として立ち寄り、標語の表彰、人権コンサート、交流コーナー、作品展示などを、楽しんでいる。令和5年度は、婦人会の手伝いやスタッフとしての活動を通して、地域とつながることの楽しさや大切さを感じることができた。

② 特別支援学校との交流

近隣に阿南支援学校ひわさ分校があり、ひわさ分校中学部生と授業交流を行っている。令和5年度には3年生と交流会を行った。県ポッチャ協会の方に来ていただき、パラリンピックの正式種目であるポッチャを教えていただいた。ひわさ分校の小学部生、中学部生を交えてチームをつくり、ともにポッチャを楽しんだ。生徒は分校の生徒にボールを渡して投げることを促し、うまく投げられたことを喜んで明るい声を上げ、共に楽しむことができた。

③ ひわさこども園 保育実習

毎年、家庭科の授業の一環として、保育実習を行っている。園児に喜んで遊んでもらえるように、手作りおもちゃを作成したり、一人一人にプレゼントするメダルも作成したりした。事前学習では、幼児と触れ合うときの接し方や配慮について話し合い、施設訪問における心構えや挨拶、態度について確認することができた。

<生徒の感想>

- ・私たちの班は、輪投げを作りました。作るのは難しくて時間がかかったのですが、こども園に持って行くとリズム室に入った瞬間にみんなが嬉しそうに見ていて、私も嬉しくなりました。メダルをあげたときに「ありがとう。」と言ってくれて嬉しかったです。
- ・私たちの班ではボーリングをしました。たくさんの子がボーリングで遊んでくれてとても嬉しかったです。去年の職場体験でいっしょに遊んだ園児が、私のことを覚えてくれていて、とても嬉しかったです。



にこにこ人権フェスティバル



ひわさ分校との交流会



ひわさこども園 保育実習

(4) 職員研修

令和5、6年度は職員研修の柱を人権教育とし、まずは全教職員で研究方針の共有、人権教育年間計画の作成や教科との関連などを協議した。各教科の人権に関連する内容と時期の整理を行い、教科間で関連させた学習ができるよう、また三年間で個別人権課題を網羅できるように、再検討した。

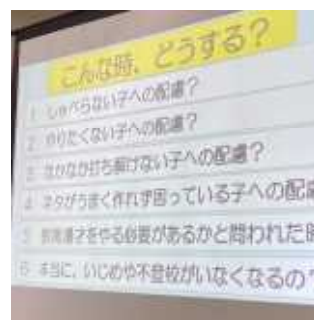
また、人権教育の研究授業と授業研究会を行うほか、人権教育について講師を招いた研修を行い、教職員の人権についての意識を高め、指導力向上をめざした。校外での研修にもそれぞれ積極的に参加し、その学びを資料の回覧や、校内研修のときに伝えるようにして共有した。

① 「教育漫才」研修会

令和5年8月、田畑栄一さんを講師に招き、「教育漫才」について研修を行った。教育漫才の意義や効果、手法について教えていただいた。実際に教職員でコンビを組んで、教えていただいたパターンに当てはめて漫才を作ってみた。

田畑さんによれば、「教育漫才」は、漫才を作り上げるために会話することが大事であり、人を傷付けない笑いを意識しながら言葉をやりとりすることを通じて、互いを認め合い、集団を高めていく手法である。相手を否定するような言葉を使わずに笑いを生むことは可能であり、温かい笑いと冷たい笑いを区分けすることが大事だと教えていただいた。実際、田畑さんの学校で取り組んだ「教育漫才」を行う映像の中の子どもたちは、それぞれ工夫した漫才を誇らしげに披露していた。

その後、場面緘黙や人前に出るのを嫌がる生徒はどうすればいいのか、コンビをどのようにつくるのか、取り組ませる時期や回数など、具体的なアドバイスをいただいた。



教育漫才Q & A

② 「性の多様性」研修会

令和5年11月には3度に渡り、徳島県人権教育指導員の徳山富子さんを講師に招いて、性の多様性について研修を行った。性の多様性について、LGBTQ+の用語や社会情勢などの知識だけでなく、徳山さんの知人の性的マイノリティの方の話など、具体的に性的マイノリティの方の人権について教えていただいた。徳山さんには研究授業と授業研究会にも参加していただき、助言をいただいた。

この研修を受け、当事者の声をぜひ生徒にも聞かせたいと、令和6年度は徳山さんと、徳山さんの教え子で性的マイノリティ当事者の方に来ていただき、10月に講演会を行う予定である。

③ 同和問題研修会

令和6年2月には、阿南市内の教育集会所所長、乾和彦さんを講師に招き、同和問題についての研修を行った。「今、起こっていること 人権の視点から考える～同和問題の解決に向けて」というテーマで、人権の歌を聞かせていただきながら、反差別の行動がいかに大切か、新型コロナウイルス感染症、東日本大震災、いじめなどの差別の仕組み、現在インターネット上で起こっている部落差別について詳しくお話ししていただいた。ご自身の体験も交えて差別解消への思いを熱く語ってくださり、とても中身の濃い研修となった。

④ 人権教育研修

令和6年5月30日には、徳島県教育委員会人権教育課の長町真一郎班長を招いて、人権教育についての研修を行った。「学校における人権教育について」と題した研修で、人権教育の意

義だけでなく、授業の組み立てやICTの活用例、指導案の様式など、具体的に教えていただいた。

⑤ ポジティブ行動支援パワーアップセミナー

令和6年度は、徳島県立総合教育センター主催のポジティブ行動支援パワーアップセミナーをオンラインで全教職員が受講した。7月1日に第1回の研修が行われ、ポジティブ行動支援の考え方について学んだ後、それぞれの学年ごとに集まって、生徒に望む行動を付箋に書き出し、内容ごとにまとめた。改めて生徒の現状や課題が浮き彫りになり、どのような支援をしていくか話し合いが進んだ。

⑥ 研究授業と授業研究会

人権に関する授業では、学年団の教職員が授業に参加し、生徒の支援や観察を行い、生徒の様子を共有するようにしている。令和5年度は各学年1回ずつ研究授業を行い、全教職員が参観し、授業研究会を行った。徳島県教育委員会人権教育課からも指導助言をいただき、授業研究会がより内容の濃いものになった。

令和6年度は一学期に各学年1回ずつ研究授業を行ったが、日和佐小学校と連携を図り、授業を参観し、指導助言をいただいた。小学生の頃を知る教職員からは、生徒の成長を喜ぶ感想もいただいている。また、研究授業の様子を他学年や別室登校生にライブ配信した。生徒が真剣に学習に取り組む様子は映像からもよく伝わり、「たくさん手を挙げて発表していてすごいと思った」「内容を知りたい」などの感想があった。



研究授業

感想・意見等

一年生の皆さんの温かさとやさしさにつつまれた授業だったと思います。しかし、やさしさだけでは、心のバリアを取り除くことが、人権を大切にした行動、実践化に十分というわけでは無いと思います。このような授業を通して、クラスのみならず、意見も共有したから、本当に大切なことや、行動実践化への勇気のようなものが見えてくるのだと思います。(一教員) 日和佐小学校

日和佐小学校教員の参観シートより

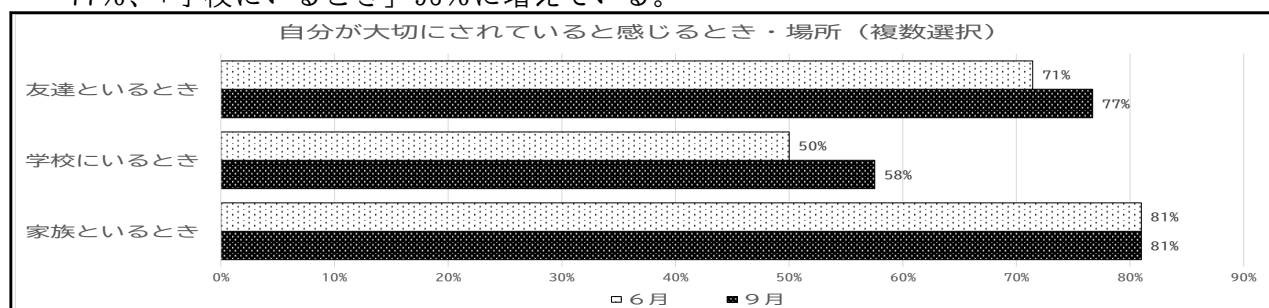
Ⅲ 成果と課題

1 研究の成果

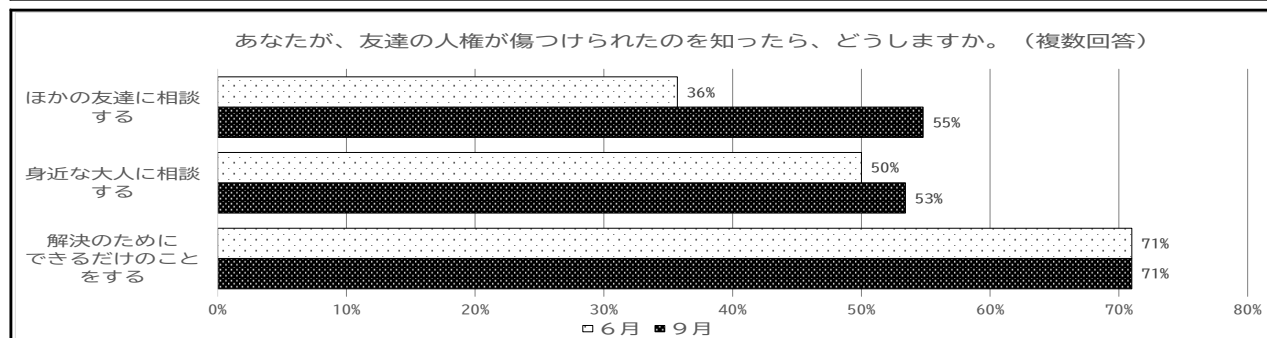
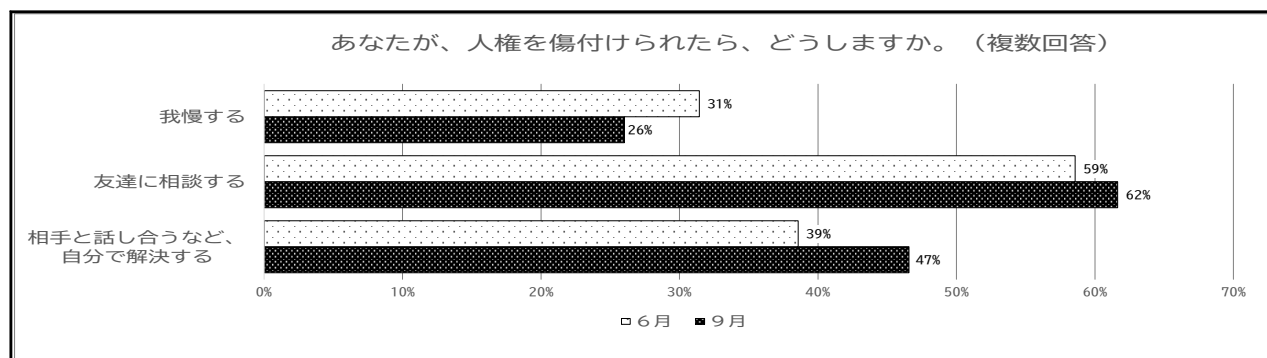
本校は、「今日も来てよかった日和佐中学校」という学校目標達成に向けて、具体的な指導の改善・工夫に取り組んできた。特に、昨年度は県の「多様性を認め合う人権教育推進協力校事業」、今年度は文部科学省の「人権教育研究推進事業」の指定を受けて、「自他の人権を尊重し、共生できる生徒の育成」を主題に、人権教育に取り組んできた。「日中トーク」と名付けた活動を日和佐中学校の取組の柱として行ってきた成果と課題として、次のことがあげられる。

(1) 生徒の変容（自己肯定感・コミュニケーション能力の向上）

令和6年6月に実施した生徒人権アンケートと9月末のアンケートを比較すると、「自分が大切にされていると感じるのはどんな場所ですか」という問いの回答は、6月には「友達といるとき」71%、「学校にいるとき」50%だった。それが、9月には「友達といるとき」77%、「学校にいるとき」58%に増えている。



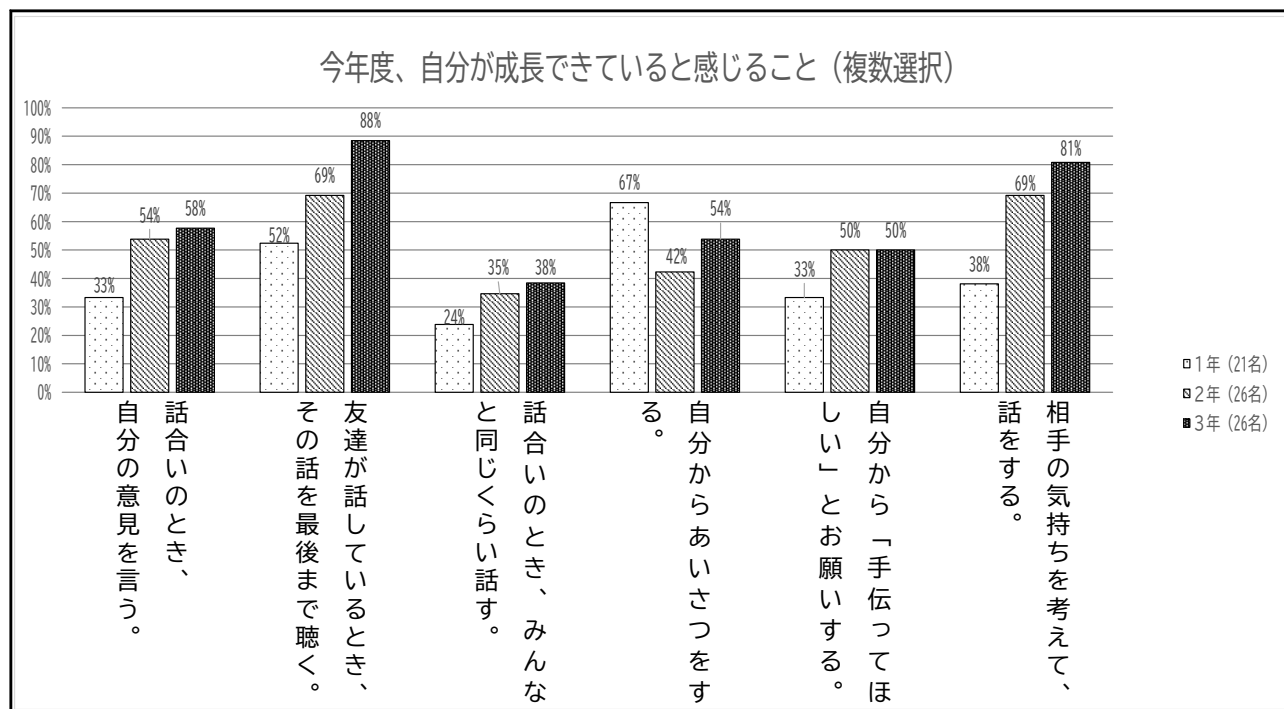
また、「あなたが人権を傷付けられたらどうしますか」という問いには、「友達に相談する」を選んだ生徒が6月には59%だったのが、9月には62%になっている。「あなたが、友達の人権が傷付けられたのを知ったら、どうしますか」という問いには、「ほかの友達に相談する」が36%から55%へと、大幅に増えている。



これらのことから、生徒にとって、学級・学校が安心できる場所になり、友達との関係が改善していることがわかる。学級での授業や活動においても、発言できる生徒が増え、発言

の声も大きくなってきており、周りに認められていると感じている生徒が増えているように思う。また、発言内容や行動に責任感が出て、相手の気持ちを考えて傷付けないような発言ができるようになってきている。話し合い活動でも、班員の話最後まで聞いてから発言し、自分と異なる意見も尊重する姿勢が見える。相手を尊重する態度が、学級や学校の安心感、友達への信頼につながっている。

そして、「今年度になって、どんなところが成長できていると感じますか」という問い（複数選択可）は次のような結果になった。



学年により違いはあるものの、「友達が話しているとき、その話を最後まで聴く」は半数以上ができていていると感じている。「話し合いのとき、自分の意見を言う」は、学年が上がるにつれ、そう感じる生徒の割合が増えており、昨年度から取り組んでいる「日中トーク」の成果が現れている。また、分団（異学年集団）活動で、体育祭の応援合戦などのために、夏休みや休み時間を使って内容や工夫を相談していた3年生は、自ら進んで話し合いを行う機会が多かったこと、その結果、体育祭が成功したことも自信となり、この結果につながっていると考えられる。

生徒にとって、学級・学校が安心できる場所になり、それを土台とした「日中トーク」の取組が、生徒の自己肯定感の向上や積極的にコミュニケーションをとっていこうとする意欲の向上につながっている。そして、話し合いの機会を充実させたことが、生徒の人権感覚の高まりにつながったと考えられる。また、他学年の人権学習の様子をオンライン配信することが、話し合い活動への刺激になった。

（2）学級の変容（人間関係の改善・協力的雰囲気）

この2年間の取組により、生徒の変容だけでなく、学級の雰囲気も前向きで、人権意識の高揚が感じられるものになってきている。

現在の3年生は、学級内の人間関係に課題があった。それが令和5年5月のhyper-QUテストでの、集団としての一体感に欠ける、いくつかのグループにわかれている状態、などの分析結果にも表れている。しかし、令和5年5月と令和6年6月に実施したhyper-QUテストを

比較すると、領域別学校生活意欲の結果（３段階）では、友人との関係が「低」であった生徒が８人だったのが、令和６年６月には３人となり、友人関係が改善してきた。また、３年生になり、別室登校している生徒が、同級生に誘われて体育祭の練習や文化祭の準備を共に行い、人権学習の授業に参加して発言ができた。少しずつ、教室に入る時間が増えている。

現在の２年生は、小学校のときほとんど登校できなかった生徒が複数いたが、中学校ではほぼ休みなく登校し、積極的に周囲の生徒と関わって学校生活を送っている。他の不登校だった生徒も、今年度に入って登校できる日が増えている。別室登校の生徒も修学旅行に参加し、全員での修学旅行が実現した。体育祭にも参加し、１人はその後も同級生に誘われて、時々教室に入るようになっていく。まだ教室に入ることが難しい生徒も、「教室に入りたいと思うときがある」と教職員に話している。

自分のことで精一杯であった頃から成長し、周囲に配慮できる生徒が増えている。別室登校の生徒へ声かけする姿や、欠席している生徒の机上がさりげなく整理したり、給食当番や係の仕事などの役割を代わって行ったりする姿が見られるようになった。周りの生徒と関わろうとする、その生徒の姿から人間関係の広がりを感じる。また、人権学習を楽しみにし、他学年の研究授業のオンライン配信にも興味関心をもって視聴し、発問への答えを一緒に考えたり、授業の様子を自分の学級と比べたりしている。

１年生については、９月の生徒人権アンケートで、「居心地のよさ」「雰囲気」「協力」のいずれも、「よい」という評価が６割を越えており、「悪い」という評価はなかった。半数以上の生徒が学級を居心地のよいものと感じている。また、一人で過ごす生徒や、遅刻をする生徒に対して、優しく声をかけることができるようになり、給食当番や係の仕事など、教職員の声かけがなくても、欠席している生徒の役割を代わって行う姿が見られるようになった。そのような友達の行動に気付いて、一緒に行う生徒も増えている。

どの学年でも、文化祭の合唱や劇をつくっていく活動では、目標に向かって一丸となって取り組み、達成できるよう努力する姿が見られた。以前にもまして笑顔が増え、メリハリをつけた生活ができるようになった。学級の雰囲気や連帯感の向上が感じられる。人権学習を通して、自他の人権を大切にすることを学び、共に生きるために必要なことは何か、どうすればよいかを考え、話し合ったこと、そして学級の安心感が、生徒の心情の変化や行動の変容をもたらしたのだと考えている。

（３）教職員の変容（人権教育に対する意識・授業力の向上）

昨年度から、教職員間で人権教育をどう進めていくべきか、検討し、研修を重ねてきた。様々な人権課題や手法を学び、教職員の知識のアップデートをしてきた。そして、学んだことをどのように生徒に伝え、生徒のどんな部分を育て伸ばしていくのか、協議を重ねることで、互いに切磋琢磨し、授業力や意欲の向上につながった。また、研究授業や授業研究会で、実践的な助言を得られ、指導方法の改善につなげることができた。教職員のICT活用も、資料の提示に留まらず、授業のオンライン配信や課題共有など、今回の研究をきっかけに幅を広げることができた。特に人権学習のオンライン配信では、別室登校の生徒に教職員が寄り添い、授業について共に考えながらワークシートに取り組んだ。どのような状況でも、教室の仲間とのつながりを大切にするとともに、生徒の学ぶ権利を守る教職員としての使命や思いを改めて確認することができた。

２年間の研究の取組をきっかけにして、教職員自身の人権教育への意欲の高まりや重要性

の再認識ができた。人権教育を大切にしたいという思いのもと、教職員間での情報共有を活発に行うようになり、他教科の授業内容も意識するようになった。また、教科の内容と人権教育の関連を考慮した教材研究や授業計画を心がけ、言葉遣いや視覚的な配慮なども意識して授業にいかしている。

2 今後の課題

「自他の人権を尊重し、共生できる生徒の育成」のための研究はまだ道半ばであり、今後も継続していくべき研究である。

これまでの研究の成果はこれまでに述べてきたが、生徒の成長を明らかに感じている。進んで声をかけたり手伝ったりする生徒、別室登校の生徒を気にして、手伝いが必要な場面に気付いて行動しようか迷う生徒、楽しそうに会話をする相手の増えた生徒の様子に、それぞれの生徒が気を配る範囲が広がっていることがわかる。別室登校の生徒も今の自分から変わろうとしており、それには教室の生徒がその思いを受け止められるようになってきたと感じられることも大きいのだろう。

しかし、生徒人権アンケートの「自分が大切にされていると感じる場所」の回答に、「大切にされていると感じない」を選択した生徒は、減ってはいるが0にはなっていない。不登校だった生徒が登校できる日が増えてきているが、欠席や遅刻、別室登校の生徒もおり、教室にすべての生徒がそろっている日はまだない。すべての生徒にとって学校が安心できる場所になるように、一人一人を大切に、小規模校ならではの強みを生かし、担任や学年団だけでなくすべての教職員が関わっていくようにしている。担任を中心に、保護者と連携をとり、生徒の状況や心情の変化に寄り添っていく、日常の取組をより高めていきたい。

生徒一人一人がそれぞれの思いをもっている。だが、それを伝える力や伝え方は様々である。これまで、「日中トーク」の目標である、自分の思いを語り、友達の思いに寄り添う姿勢を身に付けられるように取り組んできた。今後の課題は、そのさらなる向上をめざし、生徒全員が自分の思いを伝える力を高め、それぞれの個性を生かした伝え方を身に付けることだろう。それが「日中トーク」の目標の実現につながる。

そのためにはまず、教室や学校が生徒にとって安心できる場でなければならない。教職員が「日中トーク」の目標を体現し、生徒のことや人権について語り合い、生徒に寄り添う教職員集団にならなければならない。そして、生徒が人権学習の授業に参加してみたいと思えるような授業・学級をつくっていく。さらなる授業力と人権意識の向上のため、研修と研鑽を積み、一致団結して取り組んでいきたい。すべての生徒が「今日も来てよかった日和佐中学校」と思えるように。

2 令和5年度の各学年の取組

(1) 第1学年の取組

① 生徒の実態

生徒は、素直で穏やかであり、人前で話すことが苦手な生徒に自然と寄り添うことができる。しかし、学級集団としてまだ十分まとまっておらず、授業や活動では自分から発表する生徒は少なく、発表する生徒が固定されている。5月に行ったhyper-QUテストでは、学級満足感が高い生徒とそうでない生徒に大きく分かれた。学級内に人間関係の緊張感があり、生徒の意欲が素直に発揮されない状態になっているという分析結果であり、教職員から見てもそれが感じられるときもあった。ほぼ同じ学級で過ごしてきたために人間関係が固定化し、互いの様子をうかがい、関係改善を望んでいる生徒もいるが、自分を変えることができずにいる、そんな生徒がいる一方、自分のことで精一杯で周りの生徒への関心が低い生徒もいるように感じた。

このようなことから、様々な考え方や社会の変化、人の生き方を知り、世界を広げてほしい、自分の成長へとつなげてほしいと考えた。

② 男女平等

約30年前まで「男子は技術、女子は家庭科」と男女の区分けがあったという話に、生徒は驚きの声を上げた。「家庭科は男でも女でも必要なのに、なぜ」と不思議そうだったが、ジェンダーバイアス（性別による役割分業や能力・性質の決めつけ）が当時の社会に当たり前にあったことを説明し、人々の家庭科の男女共修化を求める活動の結果、男女共修になったことを伝えた。女性は結婚したら仕事を辞めて家事・育児をし、男性は会社で働くことが当時の風潮であり、今もなお残るジェンダーバイアスについて話すと、生徒も思い当たることがあったようで、「女は料理できんと、と強く言われた」など自分の体験についての声が上がった。

画像からジェンダーバイアスを見つけるクイズをすると、意欲的に発言し、鋭い意見や指摘があった。そのクイズを9月の文化祭の劇に取り入れることにしたが、台本を見て何人かが「ジェンダーバイアスだ」とすぐに指摘し、劇の台詞や動きにも案を出すことができた。

③ ハンセン病患者とその家族の人権

ハンセン病患者等の人権についての学習は、アニメ「未来への虹～ぼくのおじさんは、ハンセン病」のDVDと厚生労働省の中学生向けパンフレット「ハンセン病の向こう側」を用いた。DVDを視聴して、内容を確認、ハンセン病元患者や元患者の家族の言葉を紹介した。隔離政策がどれほど残酷か、そしてそれが約30年前まで続いていたことに生徒は驚き、憤っていた。特効薬ができて使われず、隔離政策が続いていたことや、それが政府により進められたこと、今もまだ差別が残ることなど、生徒にとっては衝撃であったようだ。紹介したハンセン病元患者のご家族の「国の政策が正しいとは限らない。何が正しいか、自分で考えて」という言葉に、生徒は何度もうなずいていた。

<生徒の感想>

- ・一人一人がちゃんとした知識をもつことが大切なことだと思います。自分でも調べてみようと思います。
- ・ハンセン病は知っていたけど、症状や偏見・差別について考えるのは初めてだったので、事態の深刻さをわかってなかったとわかった。
- ・差別が消えるのは時間がかかるんだなと思った。偏見や差別によって苦しんでいる人がいる

ことを忘れないようにしようと思った。

④ 性の多様性と人権

「わたしの願い」の「性の多様性と人権」を教材に、性の多様性について学び、性的マイノリティの人がどのようなことに苦しめられているのか、打ち明けられないのはなぜか考えた。そこから、生徒は自分たちの言動に表れる決めつけや思い込みが、自分らしく生きることができない社会をつくっていることに気付いた。また、もしカミングアウトを受けたときに、自分ならどんな言葉を返すか班で話し合った。これらの学習を通じて、誰もが自分らしく生きられるように、互いのちがいを受け入れ、大切にしようという気持ちを高めた。



班で考えた返事を発表

<カミングアウトを受けたら、どう返しますか？>

- ・好きな人は自由だから、自信をもっていいと思う。
- ・いいじゃん！ 今、相手とどんな感じ？
- ・そうなんだ、私に何かできることある？
- ・勇気を出して伝えてくれてありがとう。ありのままの自分を出しているのが、すごくいいと思うよ。
- ・勇気を出して言ってくれたんやな。今まで言えなくて不安だったんちゃう？
- ・言ってくれてありがとう。嫌なことあった？ 相談にのるよ。心配なことある？

<生徒の感想>

- ・正しい知識を身に付け、誤った情報で左右されないようにしようと思う。
- ・性的マイノリティの人がいろんなことを気にしないでいいように、差別やいじめ、悪口をなくすように努力する。自分にできることはたくさんある。

⑤ 日中トーク

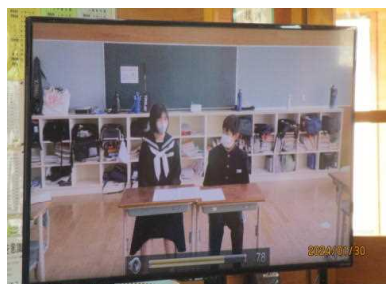
人権や自分たちの生活について見直し、自分たちの意見や気づきをコントにつくり上げることをめざして、「日中トーク」に取り組むことにした。3～5人程度の班で、題材を考えて演じることになる。最初は何をどうするのかわからず戸惑っていたが、題材のサンプルを紹介したスライドに興味深そうに眺めていた。学校生活での笑い、最近のニュース、ニュース勘違い編など、似た例に思い当たることもあったようだ。まずは各自で案をできるだけ出した。友達とのやりとりや家族との話、学校生活、これまでの学習など、人権に限らず、とにかく案を出していった。テーマを人権に絞ってしまうと、案が出しにくいであろうことも考慮し、自分たちの生活を見直し、思い込みや決めつけがないか、その行き違いや気づきを中心に考えさせた。出た案を教職員が助言してわかりやすくしたり、班で共有して相談したりして、「日中トーク」の題材にするものを選んだ。それを班でふくらませたり、他の案を盛り込んだり、協力して台本をつくった。一人では難しく苦手なことも、班で取り組むことで、案を出したり選んだり、演じる役割を引き受けたりするなど、互いに協力し進めることができた。最初は演じる

ことに照れたり嫌がったりしていた生徒も、練習するごとにせっかくだからみんなを笑顔にしたいと思うようになったようで、どう演じるか案を出したり、小物を用意したりと、意欲的に取り組んでいた。「日中トーク」は参観日に発表する予定であったが、インフルエンザ等が流行っていたため、1つの班がライブで行う以外は前日に録画したものを流すことになった。よりよいものをめざそうと録画を何度かやり直す姿や、自分たちのトークを嬉しそうに見る姿があった。また、他の班のトークを見るのは初めてということもあり、どの班の発表も楽しそうに見て、その感想を積極的に発表していた。

「日中トーク」の活動を通じて、生徒同士が話すきっかけになり、協力して一つのものをつくり上げた達成感、保護者や友達の楽しそうな様子に自分たちのトークに手応えを感じていた。



台本づくり



録画による発表



ライブのトークを観覧

<生徒の感想>

- ・みんなで話し合っ、台本をつくり、みんなで演じることが楽しかったし、今回の日中トークでいろんなことが学べてよかった。
- ・なかなか意見がまとまらず、いろいろなことをしていいものにしようと頑張っ、本番で笑ってもらえたので、とてもよかったと思います。楽しかったです。
- ・あまり会話したことがない友達と一緒に日中トークを楽しめたような気がした。日中トークが終わった後も仲よくしている。
- ・日中トークについて聞いたときは、「本当にやるの?」「できるかな?」とかあんまり乗り気でなかったけれど、やってみると、今まで知らなかった自分を発見できました。むずかしかったですが、班で協力できたことがよかったです。

<保護者の感想>

- ・グループごとに動画が異なっていて、それぞれの特色が出ていると思いました。これまでの授業参観とちがって生徒たちの笑い声が多く感じて、授業内容も新鮮な気がしました。
- ・それぞれの班で一生懸命考えた思いが出ていてよかったです。そして、何よりも子どもたちが楽しそうに授業に取り組む姿を見ることができて、こちらも嬉しく思いました。
- ・いきいきとした雰囲気の中で、生徒が意見を交わしていました。グループワークでもいったん自分の考えに向き合う時間もあり、先生や生徒同士、どんな意見でも受け入れて承認していくような、とても温かい、すばらしい授業でした。また、家庭ではなかなか見せなくなった姿も拝見でき、うれしかったです。ありがとうございました。

⑥ 成果と課題

これまでの様々な人権学習や話し合い活動から、生徒はこれまで知らなかったけれど苦しい思いをしている友達がいることを知り、世界を広げ、共に過ごした同級生の考えやそのよさに改めて気付いた。不登校や別室登校の生徒、遅刻の多い生徒がおり、まだ学級集団として十分まとまっているとはいえないが、小学生のとき登校しづらかった生徒が、「中学校は楽しい」とほとんど休まずに登校するようになった。別の生徒は小学校では保健室で過ごすことが多かったが、教室で過ごすことができるようになった。また、2年生の修学旅行に向けての平和学習や折り鶴作成を通じて、全員で修学旅行に行きたいという気持ちが高まってきた。別室にいる生徒に、自分から声をかけたり、教職員に動向を尋ねたりする生徒もいる。まだはっきりした行動には至っていないものの、固定化された人間関係を脱却しようとする変容が見られる。生徒が、活動や授業を重ねて、少しずつ成長していることを感じる。

2月実施のhyper-QUテストでは、5月の結果と比較して、学校生活意欲で「低」となる生徒が減った。その分析結果から、学級満足感の高い生徒とそうでない生徒との二極化や、学級の人間関係の緊張が解消されたことがわかる。しかし、学級生活に不満感をもつ生徒や、人間関係に辛さを感じていたり、認められていないと感じていたりする生徒が一定数いること、生徒同士の結びつきが弱いという結果も示された。欠席者0の日がほとんどなく、教室に全員がそろわない日が続いている。教室にいても、辛い思いを抱えている生徒もいる。その辛さが解消され、すべての生徒にとって教室が安心できる場所になるように、一人一人が自分の考えや思いを伝える力を伸ばして、よりよい人間関係が築けるように、人権教育を推進していきたい。

(2) 第2学年の取組

① 生徒の実態

本学年の生徒26名は、明るく活動的で何事にも積極的に取り組むことができる生徒が多い。小さい頃から互いによく知っている生徒が多く、仲がよく穏やかな関係である。しかし、そのよさが十分に発揮されず、相手の気持ちや立場を考えていない言動や、人権を尊重していないと感じられる態度が見られることがある。

5月に行ったhyper-QUテストでは、「拡散した学級集団」と判定され、いくつかのグループにわかれており、生徒が相手を牽制しながら、それぞれ自分たちのペースをつくろうとしている段階であると分析された。学校生活への意欲は全国平均とほぼ同じであるが、学級生活に満足できている生徒と不満足感をもつ生徒が混在し、人間関係に辛さを感じていたり、認められていないと感じたりしている生徒が一定数いるとのことであった。事実1年時から個々に支援を続けている生徒がいることも確かである。これらのことから、「相手を理解し合うこと」や「他人を思いやる心」の大切さに気付くことができるようにと願い人権学習を深めていった。

② 久保修さんの生き方に学ぶ

久保修さんを招き、講演会を行った。久保さんは自分の障がいのことや幼少期からの体験を詳しく語ってくれた。時には面白おかしく話して、生徒の緊張をほぐしてくれていた。生徒の感想の中には「いじめは許せない」「笑顔で講演してくれたが辛い経験や苦労を考えると悲しい」など、久保さんの生き方や思いに触れるものが多くあった。久保さんの講演を受け、「これから自分はどのように生きていくか」について授業の中で意見を交換した。

＜乗り越えていくために大事なもの：生徒の意見＞

- ・自分を大切にすること。嫌なことは気にしないこと。家族の支え。助けを求めること。一人一人が思いやる心をもつこと。挑戦すること。自分の強い気持ち。
- ・ポジティブな気持ち。たくさんの人と話すこと。周りの人に自分を知ってもらうこと。

＜これからの私：生徒の意見＞

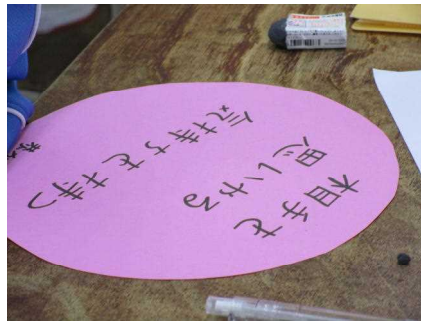
- ・誰かが困っていたらほっておくのではなく、助けにいく。
- ・私は障がい者と会ったら、手伝ったり全力で応援したりしたいです。もしも自分が障がいをおったら、周りの人の支えをもらいながらみんなと同じように生きたいです。
- ・どのような人に会っても優しく視線を合わせて接するようにしたい。
- ・相手の人のことを理解する。相手を思いやる心をもつ。自分がされてよかったことを周りの人にする。障がい者だからという理由で差別しない。障がい者のことを理解して生活する。

＜学習を通しての生徒の感想＞

- ・困っている人がいたら声をかけて手助けをしようと思いました。相手を思いやる気持ちを今よりももっともとうと思いました。
- ・みんなが平等になるようにする。
- ・障がい者のことを理解し、障がい者に会ったら、何かできることはないか考えないといけなかった。みんな同じ人間だから差別することなく優しく接する。
- ・これまで習ってきたことを生かして、周囲によいことをしたいです。



班活動



これからの私



班発表

③ 拉致問題に関する中学生サミット

若年層に対する拉致問題の広報・啓発を強化する取組の一環として、東京国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、拉致問題に関する中学生サミットが開催された。日和佐中学校から1名の生徒が参加した。全国から約60名の中学生が東京に集まり、拉致問題について学び、拉致問題を同世代、家族、地域の人に自分事として考えてもらうためにはどうしたらよいか、グループ協議、全体交流などの活動を通して協議を行った。また、北朝鮮による拉致被害者家族連絡会代表の横田拓也さんから講話をいただいた。参加した生徒は、2年続けて意見作文を発表した。

〈生徒作文から抜粋〉

私は、拉致被害者の方々に対して、今の自分に何ができるか、何をしたらよいのだろうかと考え続けました。拉致された人たちは、生きる希望を持ち続けてほしいです。

中学生の私は、今知っている拉致問題のことをもっと深く詳しく学習し、今後二度とこのようなことが起こらないように、拉致問題があってはいけないことであることを広く伝えていかなければならないと思いました。一分一秒でも早く、北朝鮮から拉致された人々を連れ戻したいです。そして、未だに帰国されていない人に、これまで見てこられなかった日本を見てほしいです。また、誰よりも大切にしてきた家族と一緒に過ごしてほしいです。

〈生徒の感想〉

・知らない土地で知らない言葉話す人ばかりの環境で過ごすことは、とても辛いと思った。これからは拉致のない世界にしていきたい。

・拉致された人たちを早く救ってあげたいです。そして、これから家族をもっと大切にしていきたいです。

・拉致問題のことを全く知らなかったけど、この話を聞いていろんなことを知った。



サミットの様子

④ 子どもと人権

昨今、子どもに関係するニュースが多数報道されている。それは日本だけに留まることなく、世界中の子どもに関係する悲惨な映像が流されている。このような現実に対して、いかに正しくもの事を判断するかが、現在の私たちに問われている。このような状況から、生徒には、これから生きていく中で、自分たちには様々な権利があり、それを基にして、もの事を正しく判断できる知識やすべを身に付けてほしいと思った。そこで、「子どもの権利条約」についてユニセフ「子どもの権利条約カードブック」を使用し、学習を進めることとした。「子どもの権利条約」が成立するまでの過程や世界共通であることなどを説明し、第1条から第40条を学んだ。その後、そのカードブックの中の事例やインターネットからの「世界の子どもたちの生活の現状」を知り、「守られていない権利は何か」、「どうしてその権利が守られていないのか」、「どのようにすればその権利が守られるようになるのか」を考え、クラス全体で意見を共有した。



守られていない権利と理由



クラスの意見の共有



世界の子どもについて調べ学習

⑤ 日中トーク

「日中トーク」は、初めて取り組むため、「子どもと人権」から学んだことを基にして「日中トーク」に広げていけるように進めていった。これまで学習した「子どもの権利条約カードブック」の事例の一つを、「日中トーク」のモデルとして生徒に提示し説明していった。トークの内容は、①自己紹介、②子どもたちの生活の実態、③「子どもの権利条約」との関連、④個人の意見や感想の四段落構成とした。そして、まず教員二人が生徒の前で「日中トーク」を披露した。ここで生徒の気持ちを掴み、1月の参観授業において保護者の前で全員が披露することも伝えた。教室の座席の列で班を作り、その後その班からペアを組み、「日中トーク」のシナリオへとつなげた。初めて取り組むこともあり、「子どもの権利条約カードブック」の事例やインターネットから検索した「世界の子どもたちの生活の現状」を生徒が選び、ペアでシナリオを作成していった。口頭での会話が苦手な生徒については、プレゼンテーションソフトで提示し、その文を教職員が代わりに読むこととした。また、当日欠席者が出た場合も教職員が代役をすることとした。作成できた後にトークの練習をし、本番を迎えた。ユーモアを少し交えたペアもいれば、自分たちの意見を忠実に伝えたペアもいた。全員が「日中トーク」を披露することができ、その後の感想も話し合った。保護者も真剣に生徒を見つめていたように感じられた。



話し合い活動



日中トークに向けての練習



日中トーク本番

<生徒の感想>

- ・世界にはまだまだ苦しんでいる人がいるんだなと思いました。日中トークを作っている時に、苦しんでいる人を助ける方法を知れたので、これからはその活動をしていきたいです
- ・話を作るのが難しく、もう一度調べたりした。人権問題について前よりいろんなことが分かってよかった。
- ・日中トークをすることで、コミュニケーション能力が向上したし、世界の状況も知れたので、すごくいい授業になりました。

<保護者の感想>

- ・どのペアも話の内容を理解して発表できていたと思いました。子どもの権利条約や人権についてしっかり学んでいるんだなと思いました。授業の中だけでなく、日頃から人権について考え、行動できるようになってほしいです。人権の内容を楽しく参観できてよかったです。
- ・おもしろさもあり、伝えたいメッセージもあり、個性もあり、自分たちで考え話し合い、発表できていたので、発表会とはちがい、それぞれの案やよさが出ているように思いました。
- ・思春期の中学生が保護者の前で漫才を発表するなんて、きつととても恥ずかしくて嫌だったはず……。それでも緊張しつつやり終えた皆の表情がすっきりとにこやかだったのが印象的でした。学んだことをそれぞれが工夫して発表できていて、素晴らしかったです。

⑥ 避難所運営

美波町では、1946年に昭和南海地震が発生しており、それから70年以上が経過している。南海トラフ地震は、100～150年間隔で繰り返し起こるため、次の発生の切迫性が高まっている。そのような中、能登半島地震が発生し、多くの方が避難を余儀なくされている。新聞でも連日その状況が伝えられ、徳島からの支援についても掲載されていた。その現状を生徒に伝える必要性も感じた。さらに、近い将来、南海トラフ地震が起こり得ることを想定した場合、現在の生徒は、避難所を運営する立場になることもある。それらのことを鑑みて、生徒の立場と運営者の立場との両面から捉えて「避難所を運営してみよう」というテーマで学習を進めた。個人から班へ、そして全体へと意見を共有し、最後に、「避難所の運営で大切なこと」を考え、全体で共有した。「その人の事情に合わせた対応をすることが大切だと思った」「みんなで助け合って協力することが大事だと思った」「生徒の勉強と両立できるようにすることが大切だと思った」等様々な意見が出され、互いの人権を尊重し配慮する大切さや安心して生活できるこ

との重要さに気付くことができた。



避難所運営の話合い



プレゼンテーション



避難所運営で大切なこと

⑦ HIV感染者等

感染症による差別が世界的にも問題視される中、HIV感染者について授業を行った。最初は、生徒はHIV感染者について「隔離されていそう」や「近づくのが怖い」などの意見をもっていた。しかし、HIVについて正しい知識を身に付け、AIDS孤児について学習すると、話合いの中で「カミングアウトされてもいつも通り接しよう」や「一緒に病気について調べて支えていきたい」など前向きな意見が出された。授業を通して正しい知識をもつことが、偏見や差別を生まないことにつながり、相手の人権を尊重するために共に行動していこうとする意欲を高めることができた。

⑧ 成果と課題

人権学習を重ねる中で、人権問題について正しく知ることの大切さを学ぶことができた。差別が背景にある問題に対して、自分がこれからどのようにしていくかを考えた。その結果、相手に寄り添って行動するという前向きな意見が多く出された。「日中トーク」では予想以上に生徒が力を発揮し、互いに協力しながら自分が学んだことをうまく表現し、級友に伝えることができていた。これからの課題としては、学習の中で班活動や全体で意見を共有する時間を増やし、自分の思いをもっと表現できるようにしていかなければならない。その表現力が、「日中トーク」を糧にして生まれてくるのだと考える。

2月実施のhyper-QUテストの結果では、学級内の規律と人間関係が不安定になっていると考えられ、生徒への個別対応と心情面に寄り添った対応が必要であり、認められる場面を意識して設定する必要があると判断された。これからも今までの取組を継続しつつ手立てを工夫し、「相手を理解し合うこと」や「他人を思いやる心」がより一層育まれるよう努力していきたい。そして、級友が困っているときに、自然と寄り添った行動や助け合うことができるような学級をつくっていきたい。

(3) 第3学年の取組

① 生徒の実態

本学年は、明るく活発な生徒が多く、全体的に仲がよい。三年間同じ学級担任であり、担任の学級経営方針が生徒に浸透している。様々な生徒がいるが、互いのことをよく知り、声をかけたり、そっとしておいたり、相手の性格や様子に合わせて対応できる生徒も多く、よい人間関係を築けていると感じる。5月に実施したhyper-QUテストからは、ほとんどの生徒が周りから認められていると感じており、それぞれの生徒が学級生活に自分なりの楽しみや、やりがいを見いだしていることがわかる。生徒にとって学級は安心できる居場所となっており、その中で自分らしく主体的に生き生きと活動できている。

生徒は仲のよい集団に支えられて力を伸ばしているが、班活動や学級の中では発言しても、全校集会や研究授業などの場では発言できない生徒もいる。誰に対しても自分の思いを語る力や自信を身に付けることが課題といえる。

② 学級目標づくり

4月最初の学級活動で、「クラスが前向きになれるような学級目標を考えよう」と呼びかけ、個人で考えた学級目標をグループでまとめ、完成させた。4月下旬の参観授業では、学級目標のサブテーマを班で話し合った。「この一年頑張りたいこと」と「どんなクラスにしたいか」について各自で考えた意見をもとに、班で意見交換をしながら、サブテーマについて話し合う姿が見られた。その結果、学級目標は「氷炭相愛・伝ひょうたんそうあい でん考成花こうせい か～笑顔の似合う怪獣の卵、夢に向かって全力投球!!～」に決定した。「氷炭相愛」は、互いの個性の違いを活かし、助け合うことを表す四字熟語。「伝考成花」は、生徒作の四字熟語で、様々なことを考え、伝え合い、大きな花を咲かせるという意味が込められている。



班でサブテーマを考える

③ 分団活動

校内球技大会や体育祭では、1～3年生を二つに分けて分団（異学年集団）とし、3年生がリーダーとして行事を進めている。はじめに、分団の役職を決め、一年間を通してのスローガンを考えている。学級活動の時間に、それぞれが個性のあるスローガンを考案した。また、今年度はそれぞれの分団旗を夏休みを利用して作成した。夏休み中には体育祭の応援合戦の計画と準備も行い、1,2年生を引っ張っていけるよう打ち合わせと練習を重ねた。その後も体育祭まで、応援合戦や競技の練習に後輩を率い、当日は見事なパフォーマンスを披露した。これらの活動を通して、生徒間の絆も、先輩としての自覚もより深くなり、生徒が大きく成長したように感じた。



分団のスローガン作成



結団式の団長あいさつ



完成した応援団旗

④ 同和問題

3年生では、「就職差別」と「結婚差別」を中心に、同和問題について学習した。「就職差別」では統一応募用紙よりも以前に使用されていた社用紙を実際に記入し、記入の必要がない項目は何か、会社ごとの用紙の是非を班で話し合った。本人の仕事に対する適正と関係のない、自分にはどうしようもない事柄で合否を判断される理不尽さに気付き、差別をなくす運動の結果である統一応募用紙と比較することで、生徒は「欄がすごく減った」「この項目は確かにいない、気付かなかった」「統一応募用紙もどんどん変わってきている」と明るい展望を感じるとともに、自分は正しい判断ができるようになるだろうという意欲につながった。

「結婚差別」の学習では、DVD「部落の心を伝えたい」シリーズより「結婚差別400事例」の視聴を通して、今もなお徳島県に残っている差別の現状を知り、これから自分たちがどう生きていくのかを考え、話し合った。話し合いの中で、もし結婚差別にあったとしても、一人ではなく応援してくれる人がいること、それが差別に立ち向かう力になると気付くことができた。



社用紙について班の意見

<生徒の感想>

- ・最初は社風がそれぞれ違うので社用紙も違っていいと思っていたけれど、会社独自の基準で作ったら、関係のない質問も入ることがあるということに、はっとした。自分が偏見をもたず、すべて平等に考えるのはもちろん、そういった人が増えるように、呼びかけていきたいと思った。
- ・授業で「知ること」は大切だなと思いました。間違っていることに気付かないと、何も変わらないと思うので、いろいろな知識を付けたいと思いました。部落差別は減っていると聞きますが、なくなったわけではないので、なくすために、まずはしっかり考えて知りたいです。
- ・自分には関係のないことだとは思わず、差別は絶対しないようにしたい。また、間違っていることは間違っていると、はっきり言えるような強い大人になりたい。

⑤ HIV感染者等の人権

保健体育科の「健康な生活と病気の予防③」で、「性感染症とその予防／エイズ」の分野の学習と系統立てて行った。感染症や性感染症について学習したのちエイズやHIVについて学習し、知識を付けた後、HIV感染者等の差別について学習を行った。生徒の身近な問題としてここ数年世界を騒がしてきた新型コロナウイルス感染症について、蔓延し始めた頃と、現在の対応や対策の違いを考えさせた。

新型コロナウイルス感染症については、わかってきたことが多く、薬などもできたことで対処などが変わってきたことを理解させた。そこから感染経路や症状など前時に学習した内容を踏まえた上で、差別があることに気付かせた。また、被害者だけでなく、差別をする側の心情も考えることで、自分たちが分からないことを避ける気持ちや、自分や周りの人間を守ろうと思うがゆえに危険を排除しようとする気持ちが、他者を排除する行動や差別につながってしまうことに気付いた。どんな人も差別されない、そして自分が差別しないために、学習する必要

があること、「知らない。わからない」で終わらないように知識を身に付ける意味についても学習した。

<生徒の感想>

- ・ 今までの常識を疑ってみる。正しい知識を知る・知ろうとする。
- ・ 間違いに気付き、自分でよく考える。
- ・ 差別をなくすためには、自分たち一人一人が正しい知識をもち、周りにそれを伝えることが効果的だと思う。
- ・ 不確かなことを人に広めない。自分の言葉の重さを知る。

⑥ 生命（いのち）の安全教育

「大切な心と体を守るために」という主題で、性暴力被害について学び、なぜ起こるのか、どのようにすれば防ぐことができるのかを考えた。生徒は相手との「距離感」についてしっかり考え、よりよい人間関係を築くために、どのようにすればよいかを、班で話し合った。さらに、性暴力が自分たちの身近で起こりうることであることも知り、加害者や被害者、傍観者にならないようにするためにはどうすればよいかということも考えることができた。



問題点と対策の話し合い



班の意見の発表



個人の意見を発表

<生徒の感想>

- ・ この授業を通して学んだことは、相手と自分、両方を大事にすることと、嫌だと思ったら「嫌だ」ということです。僕もこれから相手と自分、どちらも大切にしたいと思いました。
- ・ 私は今まで「DV」は男性が女性に暴力を振るうというイメージをもっていたので、心のDVがあることや、男女関係なく起こることだということを知り、驚いた。自分も知らないうちに偏見をもっていたのだなあと感じた。
- ・ 授業を通して、お互いの気持ちを考え合うことは本当に大事だと思いました。相手に合わせてしまうこともあるけれど、それにつけこまれると自分を壊してしまう怖さにも気付きました。お互いがお互いを思い合えるような関係を築きたいです。

⑦ インターネットによる人権侵害

技術科の授業において「インターネットによる人権侵害」について学習をした。インターネット上で人権侵害が行われる理由として、「匿名性と情報発信の容易さ」というものがある。より身近にスマートフォンなどの情報端末があり、より簡単に情報の公開ができるようになっていく世の中で大切なことは何だろうかと考えた。また、インターネットでの人権侵害は知らないところで加害者になっていることも多く、生徒自身が注意できるような具体的な手立てに

ついて話し合った。

<生徒の感想>

- ・自分が気付かないうちに加害者になる可能性があるということに驚いた。ネットのコメントなんかでも、より考えて発信することが大切だと感じた。
- ・自分が加害者になる可能性があったり、周りの人が被害者になったりすることがあるから、しっかり気を付けようと思った。
- ・簡単に投稿ができるからこそ、本当に投稿していい情報なのかを見きわめてから投稿しないといけなかったと感じた。

⑧ 成果と課題

2月実施のhyper-QUテストの結果では、5月の結果と同じく、本学級は「親和的なまとまりのある学級集団」と判定された。領域別学校生活意欲の結果も、5月と比較して、友人との関係、学級との関係のどちらにおいても高得点の生徒が増えている。

実際、班での話し合い活動が定着し、発言の多寡はあるが、全員が意見を言うことができる。班や学級だけでなく、最後の全校集会では参加した全員が進んで発表できた。人権学習後のワークシートの記述にも、それぞれの生徒の成長が見られた。話し合い活動や人権学習での学びが、生徒の考えを深め、自分の思いや考えを伝えようとする気持ちや力につながったように感じる。

この3月で生徒は卒業し、それぞれの進路に進むが、仲のよい集団から離れても、これまで培った人権についての理解や自他を大切にすることを大事に、新しい環境でもよりよい人間関係を築いてほしい。これまでに身に付けた自分の思いを語る力、周りの人の意見を傾聴する姿勢が慣れない相手に対しても発揮できるか、その検証が今後の課題といえる。

3 令和6年度の各学年の取組

(1) 第1学年の取組

① 生徒の実態

本学年の生徒は、優しく穏やかで、何事にも真面目に取り組む。しかし、自分を主張しない生徒がほとんどである。周囲の様子をうかがい、互いに遠慮して譲り合うことも多い。6月に行ったhyper-QUテストの結果では、生徒のソーシャルスキルが発揮される範囲が仲のよい友人の間だけに限られており、他の生徒との間に温度差があることが考えられるという分析結果であった。教職員から見ると、温度差がそれほど大きいとは感じないが、生徒の多くが人と関わることに消極的で、何に対しても受け身がちである。6月初めに実施した人権についてのアンケートでも、「あなたが人権を傷付けられたらどうしますか」という問いに対して、「我慢する」を選択した生徒が28%もいるように、自分の気持ちを伝えることでトラブルになることを恐れたり、言っても無駄だと感じていたりする様子が見られる。

このような分析結果や生徒の様子から、班活動を多くし、全員で協力して話合いや活動ができるよう助言している。学級の掲示物の作成も班で行う。学校行事や授業の様子を、1行事1班ずつ担当して、掲示物を作成している。写真を切り貼りし、画用紙1枚に貼って、タイトルとコメントを書き込む。人が見て嫌な気持ちになるような書き込みや写真の使い方をしないように配慮し、取り組ませている。生徒は協力し、写真のどの部分を使うか、どんな感じにするか、その活動について思い出して会話しながら、楽しく作業している。班で意見を出し合ってよりよいものにできるようになっており、取り組むたび、作業の際の会話が増え、表情が柔らかくなっていると感じる。

② 学級目標とそれを実現するための「1年A組5ヶ条」(学級活動)

どんな学級にしたいか、それぞれの考えを出し、それをもとに班で話し合っって学級目標の候補を出して「不撓不屈・一步前進～積極的に発表し、笑顔が絶えない楽しいクラスにする!!～」に決めた。教室の後ろに掲げた学級目標の周りには、生徒と学年団の教職員一人一人の今年の漢字を掲示している。

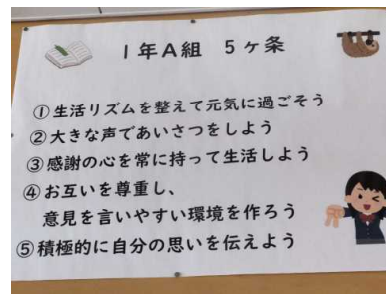
そして、この学級目標を達成するために、学級のルールを班で考えた。それらをまとめたのが「1年A組5ヶ条」で、このルールを徹底させたいと、教室の前方に掲示している。



一人一人が考えためざす学級



決まった学級目標



1年A組 5ヶ条

③ 「ちがいのちがい」

いろいろな人権問題が存在することに気付かせるため、「ちがいのちがい」について学習した。班で相談し、ちがいのちがいカードを、「あっていいちがい」「あってはいけないちがい」に分類した。まとめた意見を班で発表して掲示し、それらを見て、気付いたことや感じたことを班で発表した。

活動中、生徒から「女人禁制」が何かという質問や、児童労働として「別にバナナを売りたいなら売ってもいいじゃないんですか」という意見があった。なぜそのちがいがあるか、カードの意味を説明すると納得し、真剣にカードの分類について話し始めたが、前提とする生徒の人権に関する知識や理解について、確認が必要とわかった。

生徒はカードごとに意見を出し合い、また他の班の意見を聞いて、説明や考え方にちがいがあること、自分たちの生活や社会の中には多くの人権問題があることに気付いた。



班の意見の発表

④ ユニバーサルデザインについて考えよう

様々な人が生活する社会で、誰でも利用できることをめざしたユニバーサルデザインについて学習した。それぞれの班に、ユニバーサルデザインの商品（シャンプーボトル、両利き用はさみなど）を渡し、その商品を紹介するPOPを作った。どんな点が工夫されているか、班で相談したり、商品について調べたりして作成し、発表した。生徒はユニバーサルデザインの考え方に触れ、その商品によって困難が解消される状況を具体的に考えた。



班でつくったPOPで商品紹介

⑤ 心のバリアを取りのぞくために

「わたしの願い」の「メガネと補聴器」を学習した後、学級活動でバリアフリーについて学習した。特に心のバリアについて考え、資料の中から心のバリアを探した。心のバリアがどんな言動に表れているか、生徒は気付いたようであった。そして、障がいのある人が困っている具体的な場面について、自分ならどうするかを考えた。1班1場面を担当し、考えをまとめて発表した。生徒の発表中、「～してあげる」という言い方は最初だけで、最後は「～する」になった。また、まず声をかけて相手の希望を確認していることなど、それまでの学習が生きていると感じられた。各班の発表の後は、それぞれ各班への感想や質問を募ったが、「遠くて案内できない場所だったらどうするのか」「聞かれたことを知らなかったら」など、具体的な状況を想定した質問が出て、発表した班はよく考え、「ここまでは案内できますと説明する」など具体的な答えを返していた。生徒は、これらの学習を通じ、障がいのある人だけでなく、身近な人も含め、誰もが幸せに生きていくためには、相手の気持ちを確かめ、互いの気持ちを大切にすることが大事だと気付くことができた。



心のバリアはどこにある？

⑥ 成果と課題

中学校に入学し、生徒は新しい生活に戸惑いながらも日々がんばっている。部活動のある生活にも慣れ、休み時間には学級やホールで、思い思いに楽しく友達と過ごす姿が見られる。1学期前半には見られなかったグループのメンバーで、話に興じていることもある。班での話合いや活動でも、以前より会話が弾み、表情が柔らかくなったと感じる。授業で発言する生徒も増えた。7月4日の研究授業では、多くの教職員に見守られる中、班としての発表だけでなく、普段はあまり発表しない生徒が進んで質問したり感想を述べたりすることができた。特に質問に対して真剣に考え自分の意見を発表する姿には、参観者から感心の声が上がった。生徒も達

成感を感じたようだった。

しかし、その翌週の人権集会では、自分から発表できた生徒もいたが、初めての全校集会だったからか、2，3年生に比べて少なかった。自分の気持ちを伝える力、伝えようとする気持ちをさらに育てていきたい。

(2) 第2学年の取組

① 生徒の実態

2年生になり、学校生活において先輩としての自覚が芽生えている。特に、異学年で活動するような専門委員会や部活動では、先輩として後輩を導いている姿が見られるようになった。1学期は修学旅行を通して、仲間と絆を深めるとともに、平和学習から命の大切さを改めて学ぶことができた。2学期は日中祭の準備や練習に前向きに取り組み、2年生として日中祭をよりよいものとするために活動する姿が見られた。一方で、学級ではまわりの視線が気になる、悪口を言われている気がする、友達関係に悩んでいる生徒もいる。

hyper-QUテストでも、学級内で意欲的に活動できている生徒とそうでない生徒が分離していることで、人間関係の緊張があり、生徒が素直に意欲を発揮できない状況になっていると分析結果がでている。そこで、生徒一人一人が互いに認め合い、自分の思いを伝え合いながら学級生活を送れるように、まずは教職員が、細やかな言葉がけをすることを日々の生活の中で大切にしてきた。

② あったか言葉・ちくちく言葉

自分の気持ちを伝える言葉について考えることで、安心して過ごせる学級をつくりたいと考え、「あったか言葉・ちくちく言葉」について学習した。同じ「頑張れ」の声かけでも、伝え方によっては相手を励ます言葉になったり不愉快な気持ちにさせる言葉になったりすることに気付き、「相手の気持ちを考えて、気持ちを伝えようと思った。」という生徒の感想が聞かれた。学習のまとめとして、「ちくちく言葉 撲滅3ヶ条」を考え「信頼関係を築く」「相手の気持ちを考える」「ありがとうを日頃から言う」の3つを掲げた。その後の学校生活においては、以前よりも言動を意識して生活している姿が見られ、ささいなことでも「ありがとう」の言葉を友達同士で使う機会が増えている。



ちくちく言葉を画面上で共有している様子



共有したあと感想を伝えている様子

<生徒の感想>

- ・(画面に提示された) みんなのちくちく言葉を見て、気分が悪くなった。もう少し発する言葉に重みをもちたい。
- ・自分はそのつもりはなくても、相手にとってはちくちく言葉になっていることがある。
- ・ちくちく言葉の中にもふわふわ言葉になるものもある。

③ 人権講演会「日本人の忘れもの」

青年海外協力隊として2年間サモアに滞在していた徳島県人権教育指導員の太田光俊さんの講演を聞いた。生徒には事前に講師について「名前はミチさん」「日本語が分からない」の2つだけを伝えてあった。

講演が始まるとすぐに太田さんがサモア語で自己紹介を始めた。生徒はとまどっていたものの、英語と日本語を使いながらミチさんとコミュニケーションをとろうとしていた。写真や動画を使って、サモアでの生活を説明してくださった。途中で「サモアの国は貧しい国です。でもみんな笑顔です。なぜだと思いますか。」の問いに生徒は一生懸命に考えていた。そこで、生徒は改めて「人と人のぬくもり」や「人と人とのつながり」の大切さに気付くことができた。講演会のあと、生徒の心は温かい気持ちがあふれているようであった。



講演会の様子①



講演会の様子②



講演会の様子③

<生徒の感想>

- ・ 今回の話を聞いて、お金がたくさんある＝幸せではないことに気付いた。
- ・ 幸せとは笑顔でいることだと思いました。「仕合わせ」という言葉は初めて聞いたけれど、「めぐりあせ」と聞いてよくわかりました。
- ・ 人と人とのつながりがなければ、自分がどれだけ好きなことができてても本当の幸せを手に入れることができないことに気付いた。
- ・ サモアの人々は優しくてみんながみんなを思いやっていて、素敵だと思った。
- ・ 人と人との温もりを感じることができ、笑顔にもつながるのだと思った。

④ 文字が読めないということ

個別人権課題「外国人」の学習として、「世界がもし100人の村だったら」（開発教育協会）にある「文字が読めないということ」の教材を使って、世界には文字が読めない人たちがいることを知り、文字が読めないことによってどんな不便があるのか体験することで、外国人が暮らしやすい町について考えた。ネパール語で書かれた「水」「薬（砂糖水）」「毒（塩水）」を用意し、母親役の生徒が1つ選び、病人役の生徒に薬を飲ませ、選んだ理由や薬の味について話合いをした。この学習から文字が読めないことは命に関わる問題であることを学んだ。また識字率を示した際には、「女性より男性の方が識字率が高いのは差別ではないんですか」と発言する生徒がおり、人権感覚が育っているように感じた。

<生徒の感想>

- ・ 文字が読めないことは、すごく不便というだけでなく、命に関わることだと分かった。
- ・ 世界で文字が読めない人が14%もいることに驚いた。
- ・ 文字が読めないとどんな物か分からず、それが原因で命を落としてしまうかもしれない。
- ・ 世界中の文字が読めない人を少なくしたい。

⑤ 成果と課題

2年生になり、先輩になったことから学校生活の様々なところで成長を感じられるようになった。これまでの人権学習や修学旅行などの学習や体験を通して、感受性を磨き、人権感覚を身に付け、心身ともに少しずつ成長している姿が見られる。清掃時、別室登校している生徒に「掃除に行こう」と声をかけている生徒。欠席している生徒の配布物を机上のファイルに整えて入れている生徒。「当たり前のことを当たり前に行えるように」と担任が日々、寄り添い関わっている。ゆっくりではあるが成長している28人を見て、「横のつながり」「友達同士のつながり」を大切に、大切にするために行動できる生徒になってほしいと願っている。

日中祭（文化祭・体育祭）終了後、感想を書いた。「3年生のように行事を楽しみたい」「来年は1・2年生を引っ張れるような先輩になりたい」と多くの生徒が感じていた。友達のことが気になりつつも、自分のことに精一杯でまわりのことまで気を配れないことがまだまだある。今後も様々な取り組みを行い、互いの思いを伝え合い、学級全員が安心して過ごせる教室をつくり、「今日も来てよかった日和佐中学校」になるような人権教育を推進していきたい。

(3) 第3学年の取組

① 生徒の実態

本学年の生徒26名は、3年生になり、最高学年としての自覚が芽生え、学校の大黒柱として学習や行事に前向きに取り組む姿勢が見られるようになってきた。本校の特徴的な教育活動の一つである各学年を異学年集団の二つに分けて行われる分団活動では、各分団のスローガンを決め、全校集会で後輩に披露し、分団の団結力を高めることができた。これまでの先輩がしてきたことを引継ぎ、後輩を牽引していこうとする気持ちが芽生え、3年生としての役割を果たそうとする意欲が感じられた。しかし、支援が必要な生徒に対して、自然な声掛けができていない生徒が限られているのが現状である。優しく見守ってはいるが、もう一歩踏み出せないでいる。

6月に実施したhyper-QUテストの結果では、学級内に自由な雰囲気があり、活気があることはいい点だが、なれあいやゆるみが生じていると判定された。学習前にルールや役割を全体で確認しバランスよく割り当て、責任を果たせたかを認めていくことから学級集団は建設的に大きくまとまり、学校生活への意欲も高く維持されると予想された。このことも参考にしながら、学年全体として、「相手を理解し合うこと」「他人を思いやる心」がより一層育まれるよう、そして自然な声掛けができる生徒が増えるよう努力していきたい。



壹分団スローガン掲示



貳分団スローガンの発表

② 「ぼくにもこんな『よいところ』がある」

道徳科を学習する中で、学級の中で互いのよさについてまだ十分気付けていないと考えたため、「自分や級友の『よいところ』を見つめてみよう。」と発問した。生徒の反応は次のようであり、改めて級友のよいところに気付く機会となった。

<生徒の反応>

- ・優しく笑顔があふれている。・何事もコツコツ努力している。・仲がよい。協力できる。
- ・このクラスは、大体の人が、自分がしなければいけないことは、しっかりとやっている。
- ・明るく元気がいいクラスメート、物事に集中して取り組める。
- ・みんな、ちゃんとするときと楽しむときの切り替えが前よりもできるようになったと思う。
- ・みんな、周りを見て人を思って行動できる優しいところ。
- ・このクラスでいてよかったなと思えること、男女関係なく話し合えること、全員が自分の目標を持っていること、毎日が楽しそうな人が多いこと。

③ 人権講演会「うたや人から学ぶ人権」

～識字学級発メッセージから同和問題について学びましょう～

日本の人権獲得の歴史について学習していく過程で、生徒にとってより分かり易く具体的な内容を教えていただきたいと考え、徳島県人権教育指導員の西本篤人さんを講師として招き講演会を開催した。「うたや人から学ぶ人権」の題の通り、歌や語りを交えて、生徒に分かり易く明るく楽しく、そして心を動かされながら人権について自然と考える深い学びのある講演だった。特に「竹田の子守歌」は美しい曲だが、それは被差別部落の子守歌であり、家計困窮から六才のころから子守奉公した人がいた現実があったことや、その背景には部落差別があり、子どものころから家のために子守や旅館の靴係をしていたことも学んだ。また、女性差別は女性だけが勉強すればよいのだろうか。そうではなく男性の意識も変えなければいけないことも教えてくださった。さらに、これまで識字学級に参加した生徒の感想文を用いて、「ここに来ている人たちは一生懸命に学習していて怠けてない」「この人たちは悪くないことを改めて知った」等も教えてくださった。現在、人権について学んでいる生徒の気持ちを動かし、部落差別に対する憤りや差別解消に対する意識を高めることができた。



人権講演会の様子

<生徒の感想>

- ・ 同和問題や人権問題について、授業で習って自分自身は分かっていると思っていましたが、今回の講演を聞いて、こんなにも知らなかったことがあることが分かりました。部落差別は残酷なほどつらく、本当にこれは現実なのかなと思いました。
- ・ 同和問題は遠くにあるのではなく、身近なところにあるものだということが分かりました。また、同和問題の苦しいことや悲しいことが歌に込められていることも知りました。同和問題に対する正しい知識を広めないと、根本的な解決にはならないと思いました。これはさまざまな人権問題についても言えることだと思います。
- ・ 歌詞に込められた「差別をなくそう」という思いには、とても感動しとても大切なことだと思いました。昔の作文や、「竹田の子守歌」の歌詞を見て、差別された人々の苦しい思いが伝わってきました。だからこそ絶対になくさなくてはならないと思いました。

④ 「夕やけがうつくしい」

西本篤人さんの講演を受け、「わたしの願い」の教材「夕やけがうつくしい」を用い、識字学級について学習した。講演の中で識字学級の方の作文も紹介してくださった。背景には部落差別があり、部落差別によって文字を奪われた人がその文字を取り戻す営みとして識字学級が生まれ、その活動から識字の輪が広まり、差別解消へと社会を変えていくことのできる場でもあることを教えてくださった。その学習から「字を覚えてから夕やけがうつくしい」のはどうしてかを考える一助になり、識字学級で学ぶことがどのような意味をもつのか、具体的に考え

ることができたため、生徒の心に響き、これからの自分の生き方や差別解消への思いをもつことができた。

⑤ 「雨の指もじ」

識字学級で学ぶ姿から、部落差別解消に向けてどのような行動をしていけばよいかを考えさせるために「雨の指もじ」を学習した。識字学級で学ぶ人々の生き方を通して、部落差別について正しく学び、両親が識字学級で学ぼうと決心した気持ちや、その時の子どもたちの気持ちを考え、これからの自分の生き方について考え、その思いを伝え合った。

<生徒の感想>

- ・「文字が分からない＝恥ずかしい」というのは、部落差別が原因で生じたことだと気付きました。また、字が分からないという理由でばかにしたり、一人にしてはいけないと思いました。また、同和問題に対して正しい知識をもつことが大事だと思いました。
- ・字を読めないお母さんのために教室でずっと待っているシーンにとっても感動しました。しかもクラスみんなにそのことを伝えているシーンも更に感動しました。字を書けたり読めたりする大切さが分かりました。
- ・父の台詞で、「学校へ行きたくても行かれへんかった」という言葉がとても胸にささりました。部落差別はよくないことであって、なくすべきだと思いました。
- ・差別のせいでこんなつらい思いをしなくてはならないことを考えると、とても悲しくなりました。

研究授業では、「雨の指もじ」から、識字学級で学ぶ人々のたくましい生き方を通して、部落差別に対する憤りをもち、差別解消に向け、積極的に行動しようとする意欲を高めることを本時の目標とした。

なぜ、両親は識字学級で学ぶことを決心できたのだろう

両親の気持ち

- ・勇気を出した息子に応えたかったから。
- ・子どもたちに迷惑や心配をかけたくないから。
- ・息子が頑張っている姿を見て、自分も頑張りたいと思ったから。
- ・子どもの言葉に背中を押されたから。
- ・字が読めないことは悪いことではなく、今から学んでいけばいいということに気付いたから。

子どもたちの気持ち

- ・勇気を出していくことを決めたのが嬉しい。
- ・頑張る両親を応援したいし手伝いたい。
- ・両親に読み書きができるようになってほしい。
- ・自分たちも協力したい。
- ・自分たちのことを考えてくれて嬉しい。
- ・これからみんなと読み書きができるのが嬉しい。

これからの自分の生き方について考えてみよう

- ・僕のこれからの生き方は、挑戦している人を応援できる生き方です。
- ・親や先生に感謝しながら生活していきたい。学校に行けることに感謝したい。
- ・部落差別のために学校へ通いたくても通えない人がいたことを頭に入れて生活したい。また、それをいろんな人に伝えていきたい。
- ・近くに困っている人がいたら、優しく声をかけて、手助けをしていきたい。
- ・差別に対して正しい知識をもつ。
- ・支えてくれた人たちに感謝し、堂々と生きていく。
- ・差別をなくすには、自分から変えていかないといけないと思いました。
- ・相手を思いやりながら生きていきたい。



意見の共有



発表の様子

⑥ 成果と課題

意欲的に学校生活を送れている生徒もいれば、教室に入るのをためらい、別室で学習して過ごす時間の方が多い生徒もいる。その生徒に声かけが自然にできる生徒もいれば、声かけをためらっている生徒もいた。しかしこれまでの学習から、自分を大切にしストレスを緩和させる方法、人それぞれ違った考え方をもってよいこと、級友のよいところを見つけること、相手を思いやり行動すること、人権に対する正しい知識をもち理解すること等を学んできた。それらのことから、二学期の日中祭では、三年生が後輩をリードしていく機会が増え、それぞれが自分の役割を果たし、行事を無事終えることができた。体育祭後の分団解団式では、三年生を中心に今の気持ちを語り、最後には壺分団と式分団が一つの輪になり、一体感が醸し出された。そして、別室登校の生徒に対して、この輪の中に入るように声掛けをする場面も見られた。また、係活動の時にも自然な声かけをする場面も見られ、相手を思いやる行動が少しずつ芽生えていると感じた。これからの学校生活において、日常生活の楽しかったことや苦しかったこと、時には悩みを話すことができ、自然と教室に全員がそろう日が増えるよう、学習を深めていきたい。



壺分団の解団式



式分団の解団式



壺分団と式分団の一つの輪